

第33回 MASセミナー

「ウイズコロナ時代と建築」

一抛り所を求めて

日時：2021/03/20(土)

講演：14:00~16:00

2020年のコロナ禍は、人と人との関係に大きな変化をもたらしました。家族との関係がより身近になると同時に、WEBの力によって遠方の人々との交流が密度を増しています。しかし、今まで日常的に交流のあった人と人の関係は日増しに疎くなっている状況は否めません。このような変化の中で、私たちは「抛り所」をどこに求めていくのでしょうか？
今回は特別企画として、ウイズコロナ時代の建築について、「抛り所」というキーワードから語り合いたいと思います。建築の未来を原点にたちかえり考えていきたいと思っています。

曲り角の先が見透せない



「コロナ禍で見えてきた グローバルの危うさ」

日本国において地球上の他国との交易が始まったのは相当以前のことだが、それは日本のほんの一部のことではなかった。今日の様な急激な世界との文化、科学、経済などに及ぶ交流が一般市民にも及ぶ様になったのはつい先頃のことだ。科学は共有出来るし、経済も関係するだろう。文化に至ってはどうか？このことは鮮明になる事はあっても習うことは難しいだろう。グローバルという言葉がコロナ禍において鮮明になってきた事は確かである。



今井 均

「通気と脱炭素」

人間の「体」は、食べて寝て動き回るだけ。他は「脳」が面倒くさいことをしてきました。その「結果」が経済と科学技術の大発展で、今や、個人ではどうにもならないほど、行き詰るところに。体制を動かさないなら、個人に出来ることをやるしかなく、「職業」も組み換えや大統合を迫られています。
その観点で「体」を扱う建築家に、比較的に自然に考えられてきた「通気」と「脱炭素」への対応は重要課題です。



大倉富美雄

みんなが集まる樹の下に



太陽はあるが雲が掛かる



「脳がデジタルに直結する程・・・」

パソコン画面に向かって資料作りに励む姿は既に日常の光景であった。しかし、その資料を使った授業や打合せ迄も、オンラインでPCに向かう事になり、朝から晩までディスプレイを眺め続ける生活は新しい経験だ。脳がデジタルに直結すればする程、身体的にはアナログの心地良さを求めることに気付く。
IT化の中、未来のオフィスはリビング空間に近づいて行くと言われたのは、四半世紀も前のことだった。コロナ蔓延の中、誰もがその事を実感する時が来たと言える。



武田有左

「建築という抛り所」

人と直接会うことが困難な状況で、他人とのふれあいが激減している。WEB会議、ZOOM飲み会では解決しない不満や不安が溜まってきているように思う。建築は、リアルな身体を通して人の気配やつながりを感じ、安心を作り出す装置でもある。通風窓のデザインとともに注目するのは蓄熱体だ。適温の蓄熱体に包まれた空間は人に快適で、換気で熱を奪われにくい。抛り所となる安心感を伝える建築の在り方を空気環境から考えてみたい。



田口知子

「都市に縛られない屋上庭園」

1920年のパリ。その頃は大战で世界中にスペイン風邪が蔓延し都市生活や飲食が崩壊。生活と都市の関係性が密になり感染を増大させていた。その頃、一人の建築家が近代建築5原則を考え始めていた。その一つに屋上庭園がある。自由な近代的な生活に対する解決策であったが、感染症対策にも素晴らしい効果がある。スペイン風邪流行の11年後に完成したサヴォア邸に秘められた感染症に対する備え。現代にも生きるヒントが隠されている。



宮田多津夫

「建築は記憶を担う」

感染症は都市問題、人口集中による劣悪な環境見直しの機会到来である。地球が、自浄作用として私たちに課題をつきつけている。宇宙空間に放り出されたごとの状況でも、心の中に空間の原風景を持つことは、人が生きる立脚点として何より大切である。建築は私たちに原風景となる抛り所をつくりだす力がある。今の状況でこそ、感性に訴えるものづくりの価値は見直されるべきであろう。建築の力は記憶に結びつき心の抛り所となる。



村上晶子

「建築と街、自然との間が抛り所になる」

withコロナにおいて、三密を避ける対応として、換気の良い外部空間の利用がある。縁側や庇の下、ルーフテラスや屋上利用などの場である。そこは安心して人が集うことができ、抛り所になりうる可能性がある。ポイントはそこが自然と繋がり気持ちよいか？どんな使い方をするか？であろう。



連健夫